

大森ブレイス通信

中村ブレイス訪問記

十一月十六日研修初日の最初の訪問地は大森町、場所は石見が世界に誇る中村ブレイス株式会社である。本社は大森の街並みの端の方にあつた。



昨年の人権集会で、中村社長さんからお話を聞き、義肢装具も実際に見せていただいたが、製造現場に入るのは大人も含めて、全員が初めてだった。正面は四中の新館より一回り大きい構えで



あるが、その奥に二棟の建物が続いている。社屋に入るとコルクボードに貼られた顧客からの感謝のメッセージが目に入った。義肢装具士の渡邊洋平さんが案内してくださった。渡邊さんから、中村ブレイスの理念や歴史、製品についてお話を聞いた。六十四軒も

の古民家を再生して、観光客だけでなく、移住者も増加していると知り、とても驚かされた。大森のまちづくりにはブレイスが大きく関わっていることが実感できた。

四中の新館三つ分くらいのスペースで七十人の方が働いている社屋には、技術室のような工具が並び、活気があった。流れ作業ばかりでなく、使う人に合わせて一つ一つ調整しながら作っておられる様子に、人の体を支え、そのことで心も支えている会社だと感じた。



渡邊さんは、とても熱心に各部署を案内して、作り方を説明したり、装具を実際に身につけたりさせてくださった。ドイツ製の精密な部品で関節を作った義足で歩く体験をさせてもらったが、優れた義足であっても簡単に歩けるものではなかった。装具の開発や改良は、もちろん大切だが、使う人の努力もいるし、調整も大事だと思った。全てが人と人とのつながりの中で、成り立っていることを感じた。

渡邊さんの収入を尋ねると、答えにくい質問に「高くもなく低くもないです。」とさわやかに回答された。終始笑顔で中村ブレイスのイメージそのものの人だった。

マスク誕生

コロナ禍で、世界中が身につけたマスク。その発祥が石見銀山かも知れないとは、ごく最近まで知らなかった。

「世界を動かした日本の銀」(祥伝社新書)によると江戸文政(1818~1830年)年間の書物に「鼻袋」としてマスクのようなものが出て来るが、これは鼻だけを覆って悪臭を防ぐものらしい。



鼻袋



その点、石見銀山で安政二年(1855年)から五年にかけて医師宮太柱(みやたいちゆう)が開発した「福面」は、針金で作った枠に布を縫い付け、布の表面に柿渋を塗って、中に梅肉を入れ、鼻と口を覆うというもので、現在のマスクと同じ構造である。鉾山の粉塵による病氣対策を依頼された宮太柱が、現地調査の結果考案したもので、効果を上げたようである。

宮太柱は現在の岡山県笠岡の出身、蘭学を学び国学を教え、攘夷運動にも加わった。福面開発後は大森を離れ、明治後に友人の事件の巻き添えで配流、亡くなった。(以上「世界を動かした日本の銀」による)

宮太柱は時代の荒波に飲まれたものの、学問もし、世のため人のために生きた情熱の人という印象を受ける。ずっと石見にいれば良かったのに、と私は思った。